

神的自己述定としてのスピノザ的行為者因果：スピノザの觀念の理論とコナトゥス論の統合的な把握（スピノザにおける觀念とコナトゥス・そのⅣ）

著者	木島 泰三
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	82
ページ	77-92
発行年	2021-03-15
URL	http://doi.org/10.15002/00024071

神的自己述定としてのスピノザ的行為者因果

——スピノザの觀念の理論とコナトゥス論の統合的な把握

(スピノザにおける觀念とコナトゥス・そのⅣ)

木 島 泰 三

0. はじめに

・前稿までの考察の概観と本稿の目的

これまで「スピノザにおける觀念とコナトゥス」(以下、木島 2019 年 b を「そのⅠ」、木島 2020 年 a を「そのⅡ」、木島 2020 年 b を「そのⅢ」と略称)では、スピノザにおける知性と意志の同一性の意味を明らかにし(「そのⅠ」、そこから觀念の本質が觀念形成の行為としての「肯定」にあり、それが「行為へのコナトゥス」および「自己の有への固執のコナトゥス」の思惟における表現であることを明らかにした(「そのⅡ」)。さらにこのような肯定が「～についての肯定」であるという、表象、志向性、ないし「ニツイテ性 (aboutness)」の由来を、様態における三項的行為者因果モデルを手がかりに解明した(「そのⅢ」)。

「そのⅢ」の結論的考察によれば、まず、ある主体 S の、変状 a の産出または維持へのコナトゥスは、その主体 S を変状 a の産出または維持へと決定するデテルミナチオでもある。determinatio とは「決定」であると共に「規定性」でもあり、ある主体の変状(状態または行為)が「しかじかである」というあり方(ways)に相当する**述語的内容**を担い得る概念である。しかもそれは因果関係の局面では動詞 determinare の名詞的表現として、単なる無時間的な規定性ではなく、何かをただ 1 つのあり方に規定＝決定する作用ないし行為を示す。この点でそれは、神的無限知性において展開されている、「S について a を肯定する (affirmare a de S)」という形式の命題的な肯定とまさに同型的な過程である。本稿は、このようなコナトゥス＝デテルミナチオのあり方を、「神的自己述定」の概念の下に捉え、『エチカ』における「觀念の本質としての肯定」の実質を、すべての属性に見いだされる「神的自己述定」が担っている、という見通しを示す。

第 1 節では、スピノザにおける「実体と様態」および「様態と様態の変状」の関係を「述定」の関係と見なすメラメッドの解釈を参照し、本稿の立場を明確化する。第 2 節では、スピノザにおける「トゥールスメイカー」と「トゥールスベアラー」を特定する作業を通じ、本稿の主題を提起する準備を行う。続く第 3 節で、「神的自己述定」としての行為者因果的過程を主題的に論ずる。最終節では「觀念

の観念」を主題とする続稿への展望を述べる。

1. 内属と述定

・メラメッドの解釈

筆者はスピノザにおける神的実体と「様態」の関係と、様態である諸個物とその変状の関係が同一の関係、すなわち内属 (inherence) の関係であるという見方を支持してきた (木島 2012 年, 木島 2019 年 a, 他)。同じ見方を支持するメラメッド (Melamed 2009) の概観によれば、我々の立場と端的に対立するのは、神的実体と諸様態の関係が「内属」であることを一切否定するカーリー (Curley 1969) である。カーリーの解釈の 1 つの根拠は、「様態」の一種とされる個物が何ものか (神的実体) の述語となる、という思想は概念的に成り立たず、そのような思想をスピノザに帰すべきではない、という考察にある。

このカーリーの異議とも恐らく関連して、スピノザの神的実体と個物のような様態の間には「内属」の関係が成り立つとしても、後者が前者に「述語づけられる」わけではない (従って、この点で通常の事物と性質の内属関係とは異なる)、という解釈も存在する。メラメッドはこの解釈の支持者としてジャレット (Jarrett 1977) とカリエロ (Carriero 1995) を挙げた上で、メラメッド自身は、神的実体と様態の内属関係は、事物と性質の間に成り立つ内属関係に等しく、それゆえ個物をはじめとする様態が神的実体に述語づけられることも可能であるという、より徹底した解釈を打ち出す。本稿は、このようなメラメッドの解釈を受け継ぎ、発展させることを目指している。

・ギャレットによる内属と述定の区別、および言語と実在について

メラメッドは触れていないが、メラメッドが先行解釈として高く評価するギャレット (Garrett 2002) も「内属」と「述定」の区別を立てており、それもここで取り上げておく。

ギャレットは、日常言語が知性ではなく想像力に支配されていると見なしたスピノザは、言語的「述定」が、必ずしも形而上学的な関係としての「内属」の信頼できる指標になるとは考えなかったであろう、と指摘する (ibid.)。例えばギャレットによれば、スピノザは主体に真なる仕方で述定される「関係的性質」の多くが、主体に真の意味で内属する何かを指しているとは考えない。例えば筆者の机の上のメモ帳には「消しゴムの 3 センチ横にある」という性質が真なる仕方で述定され、この述定は消しゴムを動かすことで虚偽となる。だが、この述語はメモ帳自体に内属する変状を捉える述語ではない。

メラメッドも筆者も、形而上学的な内属関係を示さない言語的述定が存在することを否定しない。しかし我々は、内属関係を適切に表象する述定は存在し、そこにおいては項と項の間に成り立つ文法的な依存関係が、内属関係について実質的な情報を担うと解する。

たしかに、このような見方に対するより根本的な懐疑論を、ギャレットの考察の延長線上に導くことは可能であろう。つまり〈形而上学的な実体概念や内属関係がまず存在し、言語的な述定がそれを表象

する〉という見方自体が倒錯の一種かもしれず、実際には、複雑な世界を整理する便宜として、まずは「主語」や「述語」や「述定」という文法的カテゴリーを我々の祖先が（あるいは進化の過程が）確立させたのであり、「実体」や「変状」や「内属」はこのような認識上のカテゴリーを、実在そのものの構造と取り違えたものに過ぎない——このような懐疑論である。

この懐疑論を考える場合、スピノザが、日常言語が想像力に支配されたツールであることを明確に認めた上で、それでもなお日常言語を用いて哲学的な探究を行っていた、という事実を目を向けるべきである。

『知性改善論』の「ハンマーの比喻」を考えてみよう。それによれば人類にはかつて「生得の道具」（例えば手指）しか与えられておらず、それを用い、多くの労力をかけ、拙く非効率な道具を作り出すしかなかった。だがやがて、非効率な道具を用い、以前よりもいくぶん効率的な道具を作れるようになった。この過程が繰り返され、遂には鉄を鍛えるためのハンマーのような洗練された道具を利用できるようになった（TdIE 30-32）。哲学的探究も同様であり、「生得の道具」としての、わずかの、未洗練な真なる観念から出発し、それを洗練させて真理認識を深めていく（ibid. 39-40）。この考察に照らせば、日常言語とは、「生得の道具」からわずかに進んだ程度の、未洗練で拙く、さらに言えば欺きやすい「道具」であることになろう。とはいえ我々はその拙い道具によって哲学的真理を記録し、他者へ報告し、さらなる真理探究のために役立てることが現にできている。ならば、そこにはそれを可能とする、この世界のあり方に関する「真なる観念」が何らかの仕方、何らかの度合いで含まれていたと考えられよう。そして、スピノザの唯一実体説、様態の理論、および本稿とそれに先立つ諸論考が一貫して依拠する行為者因果図式などは、そのような萌芽の真理を洗練させる試みとして位置づけられるであろう。

・メラメッドの述定概念と本稿の述定概念の相違点

メラメッドは「述定（predication）」について、何らかの主体への性質や変状の内属が、主語と述語という形式において表象可能である、という構造のみを理解しているように思われる。一方、本稿では「述定」を、一定の述語内容を規定＝決定する作用ないし行為を指すために用いる。すなわちそれは単なる「述語的關係（predicative relation）」ではなく「述定行為（predicative act）」を指す。

この主題に関連するテキストとして注目すべきは、メラメッドが自説の傍証として引く、『エチカ』の次の一節である。

……ゆえに人間は、他者の本性に固有で、自己の本性にとっては疎遠なものが、行為する力、あるいは（同じものだが）徳であるとして、自己について [de se] 述定される [praedicari] ことへの欲望を、決してもたない。……。 (3P55C2Dem)

ここでは先にも挙げた *affirmare a de S* とほぼ同義と思われる意味で、（受動を能動に直せば）*praedicare a de S* という表現が用いられている。メラメッドはこの *praedicare* が述定行為であるとい

う事実を重視していないが、本稿はその点を重視する。また、ここでの *praedicare* は *affirmare* の同義表現であるが、本稿がスピノザに帰する「神的自己述定」は言語的な *predicare* でも、心的な *affirmare* でもなく、いわばそれらを根底で支える過程である。とはいえここではこの相違点より、スピノザがそこに見いだされる働きを *praedicare* という動詞で捉えた、という事実こそ重要である。

なお、これまでも示唆してきたように、元来「主語」と「述語」、および「述定」とは、対象を表象する記号、およびその記号間に成り立つ関係を指すが、本稿は今のところ、「神的自己述定」がどのように実現された記号関係であるのかを明示できていない。現段階で示しているのは、そこに、ともかく主語と述語の間に成り立っている構文論的な関係（と呼び得る関係）が確立され、それが内属関係を表象している、ということだけである。次節ではこの点をより詳しく考察するための予備的考察を行う。

2. トールースベアラーとしての観念

・アームストロングの普遍実在論、およびトロープ説と四カテゴリー存在論⁽¹⁾

オーストラリア唯物論の代表者であるアームストロングは、永年にわたり唯物論と科学的実在論を基礎づけ得る形而上学の構築作業を続けてきた。その形而上学の中心的教説の1つに、一座の述語に対応する存在者である性質 (properties) と、多座の述語に対応する存在者である関係 (relations) を含む普遍者 (universals) の実在論がある。この立場は、中期の形而上学研究の集大成である『諸事態の世界』(Armstrong 1997) の表題が示唆するように、ヴィトゲンシュタインが『論理哲学論考』(ヴィトゲンシュタイン 2003 年/1922 年) で提起した「事実主義 (factualism)」をベースにしている。これは、(名に対応する事物や対象ではなく)「命題 (propositions)」に対応する「事態 (states of affairs)」または「事実 (facts)」を世界の構成要素とする立場である⁽²⁾。

アームストロングの普遍者はプラトンの超絶的普遍者ではなく、個物に例化 (instantiated) されることで存在する内在的普遍者である。さらに言えば普遍者も、「薄い個別者」たる「裸の個物〔個別者〕」も、存在の基本単位である「厚い個別者」としての事態から、ロックの言う partial consideration (Locke 1975/1689, II, xiii, 13) によって見いだされる抽象物だとされる (Armstrong 1997, pp. 110, 123)。この「個別性の勝利」(ibid. pp. 126-7) において、アームストロングは唯名論の洞察を継承する。

アームストロングの普遍実在論と競合する立場にトロープ説 (trope theory) がある (cf. Armstrong 1997, pp. 24-25, 30-31, 98-99)。トロープ説もまた性質や関係の実在論を支持する点で伝統的唯名論から離反するが、性質や関係を「例化された普遍者」ではなく、それ自体「トロープ」と呼ばれる個別者と見なし、普遍者の実在を否定する点でより強く唯名論の伝統を受け継ぐ。(広義の)トロープ説はさらに、個物を「トロープの束」に解消する「束説 (bundle theory)」(狭義のトロープ説) と、個物 (ないし実体) とトロープの存在論的区別を保持し、トロープを個物に内属する「様態 (ways, modes)」として位置づける「様態説 (mode theory)」に分かれる (cf. Heil 2003, ch.13)。ロウの「四カテゴリー存在論」(Lowe 2006) はこの論争状況下でアリストテレスの枠組みを復権し、普遍者としての「自然

種」と「性質・関係」, 個別者としての「個物 (実体)」と「様態」のすべてのカテゴリーを保持する。

ジャレット, カリエロ, メラメッドらは, スピノザの様態や変状をトロープとして位置づける解釈を支持し (Jarrett op.cit; Carriero op.cit.; Melamed op.cit.), カリエロはさらにスピノザに四カテゴリー存在論を見いだす試みも行う (ibid.)。筆者もまた, スピノザの立場が現代の「様態説」とよく一致する点, およびスピノザに四カテゴリー存在論を積極的に認める点で彼らと一致する (木島 2019 年 a, 第 5 章)。但し筆者は, スピノザにおける普遍者 (共通概念と特質 (proprietas), および無時間の本質) は, あくまで個物の認識の中で, 抽象の過程を経て見いだされるものとして位置づけており, この点でアームストロングの「個別性の勝利」に近い思想をスピノザに帰す (ibid.)。

・スピノザと関係の実在論

スピノザの時代的制約にも触れておく。ここで見てきたように, 現代における性質の実在論は関係の実在論と軌を一にしている。ここでは「関係的性質」と「関係」の相違に注意すべきである。先ほど見たように, 「消しゴムの 3 センチ横にある」という一座の述語は, メモ帳に内属する真の性質を述べたものとは考え難い。しかしメモ帳と消しゴムの関係を問題にする場合, 現代の普遍実在論やトロープ説は「A が B の 3 センチ横にある」という二座の述語を, 世界内に実在する関係を述べるものと判定するはずである。

スピノザは, 一座の述語によって表象される「様態」ないし「変状」の実在論を支持する一方, 関係の実在性には否定的な見方をとっていたと見られている (Carriero 2015)。ここには「関係的性質」と「関係」の混同のような時代的制約が存在するかもしれない。しかしながらスピノザにおいても, 関係の実在論の不在をある程度補う思想は見いだし得る。すなわちスピノザは複数の事物による「協働的行為」の余地を明確に認めており (2Def7), 筆者はこの思想をベースに, スピノザにおける複合物体の形相を, 主体としての要素的諸物体が協働的に産出し, 所有し, 維持する変状として位置づけた (木島 2012 年, 木島 2019 年 a, 第 3 章)。この思想はスピノザにおける関係の実在論の不在を, その重要な部分に関して (とりわけ事物の因果的な力に関連して), ある程度補い得るであろう。

・トゥールスメイカーとトゥールスベアラー

アームストロングの普遍実在論はトゥールスメイカー (真化者) 論を大きな動機としている。アームストロングが指摘するように, この思想は「真理対応説」の核心をなしてきた洞察を再定式化した思想であり, そこでトゥールスメイカーとは, 命題を真たらしめる, 世界内に存在する何ものかだとされる。すでに見たように事態 (ないし事実) とは命題と同じ仕方で構造化された存在者であり, そのような構造をもつがゆえに命題のトゥールスメイカーたり得るが, 同じ役割を単なる個物や単なる普遍者が果たすことはない (Armstrong 1997 pp. 113-119)。トロープ説も, 四カテゴリー存在論も, それぞれの仕方では命題のトゥールスメイカーのあり方を指し示している。

トゥールスメイカー論と関連する議論に, トゥールスベアラー (真理運搬者) 論がある。真理を「真

理たらしめるもの」がトゥールスメイカーであるなら、トゥールスメイカーによって「真理たらしめられるもの」がトゥールスペアラーである。すでに述べてきたように、大まかな共通見解としては、事態を表象し、真理であったり虚偽であったりする単位、すなわち真理値の担い手である単位としてのトゥールスペアラーとは「命題」だとされる。だが、そもそも命題とは何であり、あるいは命題と真理値がどのように関わっているのかについては、様々な見方がある。例えばフレーゲの時代から存在する見方によれば、命題とは、言語表現や心的判断などとは区別される抽象の対象であって、プラトン主義的に理解された「数」と同様、自然的世界とも、個人の精神とも独立した何かだとされる。一方、「そのⅠ」で取り上げたギーチ (Geach 1965) はこの種の見方を遠ざけ、命題とは言語的に表現されたものに他ならないという立場をとる。他にも、この後取り上げるローゼンタールのように、命題的に構造化された心的行為こそ真理値の担い手である、という見方もある。

・スピノザにおける狭義の真理論と広義の真理論

先に進む前に、スピノザにおける「狭義の真理論」と「広義の真理論」を区別しておく。

「狭義の真理論」とは、スピノザの「真なる観念」についての思想であり、以下の公理において表明されている。

真なる観念はその観念対象 [ideatum] と一致しなくてはならない。(1Ax6)

一方、「広義の真理論」とは、下記の「十全な観念」をめぐるスピノザの思想を指す。

十全な観念について私が理解するのは、対象との関係なしでそのものにおいて考察された限りで、真なる観念の諸特質ないし内的諸徴表 [denominationes intrinsecas] のすべてをもつような観念である。(2Ax4)

私は内的諸徴表と言う。これは、外的諸徴表、すなわち観念と観念対象との一致を除外するためである。(2Ax4 Exp)

これらの規定によればまず、観念が「真である」とは「その観念対象と一致すること」を指し、これは当の観念にとっては「外的徴表」である。一方観念が「十全である」とは、「対象との関係なしでそのものにおいて考察された限りでの」特徴であり、それゆえ「内的徴表」と呼ばれる。「十全な観念」の実質的な説明はこの後の 2P11C においてなされるが、それは観念相互の包含関係に関わる規定であり、従って思惟属性外の対象を参照せず、思惟属性内で完結する規定である⁽³⁾。

スピノザにおける「真なる観念」をめぐる議論を本稿では「狭義の真理論」と呼ぶ。この議論は、「真なる」の定義からして、観念と観念対象との一致不一致、あるいは対応を問題にする。一方、「十全な観念」と「真なる観念」は必然的に一致するがゆえに⁽⁴⁾、「十全な観念」めぐる議論もまた「広義の

真理論」と呼び得るが、こちらは「真理対応説」としての性格をもたない。詳しい検討は別途行うが、筆者はこの「広義の真理論」こそ「狭義の真理論」を根底で支える実質的な理論であり、それゆえスピノザの真理論を最終的に非・対応説的と見なす解釈（e.g. 上野 2005 年）に同意する。しかし「狭義の真理論」に限れば、スピノザの中に真理対応説的な「トゥールスメイカー」や「トゥールスベアラ」を見いだすことには、相応の根拠を主張できるのである。

・心的行為としての観念——ローゼンタールのカーリー批判を参照して

このような「スピノザの狭義の真理論」におけるトゥールスベアラの問題を、現代の論争を踏まえて考察しよう。

カーリーの『スピノザの形而上学』（Curley 1969）は、多くの点でアームストロングの形而上学とよく一致する科学的实在論の体系を、スピノザの形而上学の中に読み込んでいる⁽⁵⁾。とりわけ両者は、ヴィトゲンシュタインの「事実主義」をベースにしているという共通点をもつ。カーリーのスピノザ解釈においては、延長の様態を「事実」、その観念を「命題」と同一視する、という読み替えにおいて、この性格が明確に見いだされる⁽⁶⁾。

カーリーはその後の「デカルト、スピノザ、信念の倫理」（Curley 1975）において、同じ解釈をベースに、スピノザのデカルト批判を次のようなものとして再構成する。まず、命題はそれ自体で真か偽かいずれかに確定している。それゆえ命題を把持し、あるいは理解した時点で、それが真であるという判断はすでに命題の内に含まれる。ゆえに、それ以上の心的行為、つまりデカルトが判断のために必要だと考えた「意志」のような働きは不要である——このような批判である。

この批判は、ヴィトゲンシュタインによるフレーゲの「判断線」の冗長性への批判（ヴィトゲンシュタイン 2003 年／1922 年、4.06 以下、4.442）を下敷きにしていると思われる。ここでヴィトゲンシュタインの批判に詳しく立ち寄ることはできないが、このカーリーの解釈に対するローゼンタールの批判は、「そのⅠ」で取り上げたフレーゲの「判断線」をめぐるギーチの議論と密接に関わる主題を扱っている（Rosenthal 1986）。

ローゼンタールによれば、カーリーの解釈は、命題がそれ自体で真理値をもつことを前提する。だが、抽象の対象としての命題が真理値の担い手となることはなく、真理値の担い手となるのはむしろ個別的な心的行為である。それゆえ、抽象の対象である命題を把持する能力と解された「知性」だけでは判断は成り立たず、そこに心的行為すなわち「意志」が加わる必要がある——ローゼンタールはこのようにデカルトの判断論を擁護する。

ここでローゼンタールが提起するトゥールスベアラの見方は、まさにスピノザ的な意味での「観念」に適切に当てはまる⁽⁷⁾。スピノザにおける真理値の担い手、あるいはトゥールスベアラとは言うまでもなく「観念」に他ならないが、「そのⅠ」で示したとおり、スピノザにおいて「意志と知性は1つの同じもの」（2P49C）であり、あるいは観念はその観念の肯定＝判断と一体のものなのであった。

ローゼンタールの見方は、「知性」ないし「観念」を「命題内容」、「意志」ないし「意志作用」を

「心的行為」と見なし、両者をあくまで峻別する点で、単純な「判断の二段階説」ではないとしても、依然としてデカルトに忠実である。一方スピノザの場合、心的行為と一体化した命題、あるいは、命題的に構造化された心的行為の全体が「観念」に相当するのであり、ここでは「観念」の捉え方が異なっている。そしてカーリーの解釈は、ローゼンタールが「観念」として取り出した抽象的な命題内容をスピノザ的な「観念」として位置づける点で、「そのⅠ」で批判したベネット（Bennett 1984, sec.38）同様、スピノザにスコラ的な「判断の主知説」への単なる逆行を帰すことになるように思われる。

たしかにカーリーは、判断＝肯定を自由意志に帰属させる「判断の自由意志説」と、それに基づくタイプの「信念の倫理」への批判をスピノザに見いだす点では適切である。だがカーリーは、スピノザの立場が「決定論的な判断の意志説」であることを見ず、スピノザにおける「判断の意志説」および「信念の倫理」の全否定を主張する。だがスピノザはまさに**決定された意志を基盤に据えた倫理学**を構想していた以上、スピノザにおいて信念に**自由意志**が介在しないことから、直ちに、スピノザにおける「信念の倫理」の不在が引き出されることもないはずである。

・メイソンの解釈とカーリーの解釈の調停

ここでメイソン（Mason 2007, ch.1-4）による別のカーリー批判も取り上げよう。メイソンは、スピノザの必然性は具体的な res すなわち事物を決定する必然性である（e.g. 1P33S），という指摘から、カーリーに代表される、スピノザの必然性概念を「論理的必然性」と見なす解釈に異議を唱える。一方のカーリーは、すでに『スピノザの形而上学』において、スピノザが「必然」概念を res に適用するとき、その res は現代で言う、論理学的命題に対応する「事実」（そこには、普遍的法則命題に対応する「普遍的事実」も含まれる）を指している、という読解を与えている（Curley 1969, pp. 88-89）。

本稿の読解は、メイソンを支持しつつ、メイソンが形容矛盾的な表現として意図した「具体の論理（concrete logic）」を字義通りの意味で解し、カーリーの洞察をも活かす読解を可能にする。すなわち、スピノザの言う「諸観念の秩序と連結」（2P7）を命題的に構造化された心的行為＝観念の形成／維持の因果的連鎖だと解するならば、それはまさに「具体の論理」と呼び得るだろう。また本稿の読解はスピノザに抽象的対象の余地を認める以上、カーリーが「命題」として見いだす抽象的単位の余地をもスピノザに認める。すなわち、「具体の論理」として持続の中で進む因果連鎖の中には、共通概念として取り出される様々な無時間的真理が埋め込まれており、このような無時間的、一般的な真理を論理的な必然命題や普遍命題として取り出すことはできるはずである。但しそれは例えば命題計算のような実践に役立てるため、具体的な個物の構造を我々が抽象的、部分的に考察して見いだすものであって、それ自体で自足するアイデア界のようなものを構成するわけではない⁽⁸⁾。

3. 神的自己述定としてのコナトゥス＝デテルミナチオ

以上の考察を踏まえ、本稿の中心主題である「神的自己述定」の概念を提起しよう。

・コミュニケーション過程としての行為者因果

因果関係を「力の行使」の概念を軸に理解する行為者因果図式においては、ある事物の内に産出された変状は、己が外属する他動的原因と、己が内属する内在的原因「についての」規定＝決定を与える。本稿では、このように述語的内容の規定＝決定として見られたコナトゥス＝デテルミナチオの行使を「神的自己述定」と呼ぶ。

この神的自己述定は、スピノザの「狭義の真理論」に特異な性格を与える。そこでのトゥールスベアラは神的無限知性における、それ自身に断定力を含む真理判断の連鎖であるが、それらに対応し、それらを「真理たらしめるもの」としての諸事物の中にも、真理判断における断定力に相当する要素としての神的自己述定がすでに含まれており、この要素自体においても、両者に対応しているのである。

「述定」と呼ばれる以上、神的自己述定は諸記号の配列において遂行される記号的過程である⁽⁹⁾。しかし、言語記号をはじめとする通常の記号とは異なり、その単位となる「記号」は自己表示的記号であり、そこでは記号対象と記号それ自身が一致する。例えば、「犬が吠える」という行為は同時に、主語項としての犬が、自分自身について、吠える行為そのものによって吠える行為を述定する記号的行為であり、そこにおける犬と吠える行為は、行為主体と行為であると共に、それら自身を表示する記号でもある。

言語記号においても「犬という字は四画である」のように、記号対象と記号それ自身が一致する事例はあり得るが、これは本来言語外の対象を指し示す記号が当の記号そのものを指し示す事例である。一方、神的自己述定においては、自然的諸事物がそれ自身を表示する記号として働くことによって「記号対象と記号それ自身の一致」が成り立つ。加えて、吠える犬の例が示すように、そこでは記号使用者（述定行為の主体）と述定における主語が同一であるという再帰性も存在する。つまりそこには『短論文』で「事物自身が我々の内で自身についてあることを肯定ないし否定する者である」（G I p. 83, 「そのⅢ」参照）と言われていた構造が成り立つ。この再帰性ゆえ、それを構成する記号を、通常の文字や発語のような、使用者による使用を待たなければ記号として働き得ない「受動的記号」と対比して「能動的記号」と呼び得る（神的自己述定の単位としては、犬や人間が産出した変状（＝準・個物）としての音声もまた、それ自身のコナトゥス＝述定力をもつ能動的記号である）。

能動的記号としての事物はそれ自身の本性の必然性に従って行為し、諸事物の内的必然性の総体がいわゆる自然法則を構成する⁽¹⁰⁾。このようなものとしての自然法則と、それに先立つ主体と変状の階層構造が、神的自己述定を構成する「構文論」に相当する。これを「神的構文論」と呼んでおこう。

ここでの「神的」という呼称は、それが神＝自然の基礎的な因果過程と一体化した述定であり、その規則であることを第1に示す。だが同時にそれは、その述定の究極の述定主体と、述定がなされるべき主語と、その主語の記号対象とが、すべて神の実体としての神である、ということも意味する。つまり神的自己述定とは、突き詰めれば神自身による神自身についての述定であり、神的構文論とは、神の自己述定の様式を構成する法則である。

神的構文論としての自然法則やそれに先立つ存在論的構造（主体／変状）は、単に存在者がとり得るパターンやそれを秩序づける法則ではなく、本質的にコミュニケーション的な過程の枠組みであり、本質的に情報伝達概念によって理解され得る過程を枠づける。この点で神的自己述定は言語的述定に類似する。それはコミュニケーション的過程であることによって事物の表象あるいは認識を可能ならしめ、また、内心の信念や判断のようなプライベートな表象ではなく、開かれた表象である点で、公共的表象としての言語的表象に類似する。

神的自己述定がコミュニケーション的行為であるという性格は、とりわけ主体 A が主体 B の内に、主体 A に「外属」する変状を産出する他動的行為において明瞭である。しかしまた、主体 A が主体 A 自身に内属する変状を産出する場合も、A 自体の本質を A 自体が表現する規定＝述定の行為としてのコミュニケーション的行為と見なされ得る。それらはすべて、神の自己原因的＝自己表現的な、本質＝力の表現の一部である（1Def6, 1P34Dem, 1P25C⁽¹¹⁾, 3P6Dem）。

このような神的自己述定は、「表象」すなわち「再-呈示」ないし「代-呈示」（*re-presentation*）であるよりは「呈示」（*presentation*）と呼ぶのが適切かもしれない。とはいえ、本質的に記号的、表現的、コミュニケーション的過程であるという点ではそれを「表象」と呼ぶことにも相応の適切さがある。それは例えば飼猫が身を擦り付けてくる行為が、同時に猫による、猫についての、「くすぐったさ」という混乱した変状の述定であるような、因果的な力の行使と述定行為が本質的に一体であるような過程である。

これは異様な見方だと受け取られるかもしれないが、しかしスピノザの基本思想の整理から自然に引き出される帰結である。前稿までの考察は、すでに、〈主体／変状〉がスピノザにおける基礎的なカテゴリーであり、かつ、主体が変状の作用因となる行為者因果こそがスピノザの因果理解であることを基礎に、変状を産出し維持する〈主体＝原因〉のコナトゥス＝デテルミナチオが、その主体「についての」述語的内容をただ1つに決定＝規定する過程であることを示してきた。本稿が付け加えたのは、この決定＝規定を新たな名で呼び替えることのみだといってもよい。その過程がコミュニケーション的過程であるという考察もまた、観念間の因果的依存関係を規定する 1Ax4 を、精神による外的対象の知覚の基礎に据える 2P16Dem から導かれる、『エチカ』の論理に即した考察である。そこにあるのは、「思考と世界」と呼ばれてきた主題に対する、類例のないアプローチである。

・2種類の「ニツイテ性」の区別再考

以上のような神的自己述定を、改めて観念の本質としての肯定と比較しよう。

「そのⅢ」冒頭では、観念の本質としての肯定に「根底的なニツイテ性」と「派生的なニツイテ性」を区別した。前者は、観念が身体や身体変状という思惟属性外の対象「についての」観念であると言われるときの「ニツイテ性」、後者は、身体変状の観念が、その変状が内属／外属する主体「についての」観念であると言われるときの、属性内で完結する「ニツイテ性」であり、前者を観念の「ニツイテ性」を余すところなく捉えている点で「根底的」、後者をその一面のみを捉えている点で「派生的」と呼ん

だ。しかし本稿は今や、この区別の本性を再考すべきところに来ている。

属性内で完結する派生的な「ニツイテ性」は、すべての属性に共通する因果的過程としての神的自己述定に基礎をもつ。この後の区別の便宜のため、こちらの「ニツイテ性」に「自然的志向性 (natural intentionality)」という名を当てる。「自然的」とは、それがあらゆる属性に見いだされることを示し、「志向性」という呼称は、現代の「力 (power)」の概念に依拠する形而上学における、心的表象ないし心的志向性を、より一般的な力の理論の中で捉え直そうとする試みに倣っている⁽¹²⁾。一方、観念と思惟属性外の観念対象との間の「ニツイテ性」には「心的表象 (mental representation)」という名を当てる。「心的」とは、思惟属性に属する単位としての観念のみによって担われることを示し、「表象」は、後述するように、それが再呈示ないし代呈示という、典型的、範型的な記号関係であることを念頭に置いている。これらはあくまで便宜上のレッテルだが、この区別を、神的自己述定に関連づけて改めて注視する作業は重要である。

・受動的記号関係としての心的表象

自然的志向性は思惟属性を含むすべての属性に見いだされるが、すでに見たように思惟属性における自然的志向性は、そのみでは完全な心的表象を与えない。では、心的表象はそれに何を付け加えるだろうか？ それが付け加えるのは（我々の精神に即して言えば）、そこでなされている自己述定が、単にその思惟様態そのものについての述定であるのみならず、己の観念対象としての身体や身体変状や外的諸物体についての述定であるという「意味」である。この剰余分の意味が思惟様態に、単なる一樣態にとどまらない、「観念」と呼ばれる心的表象の単位としての資格を与える。

この剰余分の意味をどのように位置づけるべきだろうか。最も平易で適切だと思われるのは、〈我々は思惟の様態を、対応する延長の様態を表象するための記号として用いている〉という説明である。対応する思惟の様態と延長の様態は「同じ一つのもの」(2P7S)ではあっても、異質な属性に属すると見られた限りで、別のものとして扱われる。それゆえそれは自己表示的な記号というより、己ならざるものを指し示す単位としての、より典型的、範型的な記号である。そしてこのような記号関係が、観念と対象の非対称な関係を説明する。観念は物体を表象するが物体が観念を表象すると言われないのは、観念が物体の記号として用いられる思惟の様態である、というこの記号関係に由来するのである。

ここで確立される剰余分の記号関係が、極めて実質に乏しい、受動的な記号関係であることに注意しよう。つまりそれは「真理たらしめられるもの」と「真理たらしめるもの」の双方に含まれる能動的記号過程にその実質を負っている。スピノザが述べるように「その諸属性の各々が、その属性自身に基づいて概念されるというのは、実体の本性に属する」(1P10S)のであり、すなわち各々の属性は自己完結し、それ自体のみで無限な神の実体の本質を表現している。そこから「心的表象」を導くために必要なのは、2つの属性に記号的対応関係をいわばあてがい、思惟様態の自己述定が、延長様態の自己述定を指し示している、という「解釈」を付け加えることだけである。

この「解釈」はデカルト的二元論と共通する前提と共に与えられる。すなわちスピノザはデカルト主

義者たちと共に、思惟と延長が相互に異質な属性であり、前者に観念が、後者に身体が属することを前提する。そしてこの前提に従うとき、表象する属性の様態を「観念」、表象される属性の様態を「物体（身体）」と呼び分ける記号関係が確立するのである。

だが実のところ、二元論的な通念を離れ、スピノザの体系に即して考える限り、少なくとも筆者にとって、「ある自己述定的な延長様態」と「その延長様態の観念」の、一体どこが異なっているのかは不可解である。この（少なくとも筆者にとっての）現象的事実に即する限り、心的表象とは、まったく同じ事物（例えば猫）を、ある時はその事物自体を指し示す記号（神的知性内の猫の観念）として、またあるときはその記号によって指し示される対象（猫そのもの）として、あたかも別のものであるかのように取り扱うという、複雑だが名目的な記号の実践と区別し難いものになる。そしてこれは、スピノザの無限数属性論、あるいは延長属性以外のすべての属性が、少なくとも成熟期の⁽¹³⁾スピノザの体系にとって本来不要な剰余物なのではないか、という考察を示唆する。

4. さらなる展望と続稿の課題——「観念の観念」をめぐって

・より大きな展望と課題

前節で示唆された考察にはもちろんさらなる論証が必要であるが、筆者はそれを2つの方面から具体化する準備がある。1つは〈神的実体は無限に多くの実在的に区別される属性を備えており（1P10S; 1P11）、全属性の全様態を対象とする別々の諸観念が神的無限知性に含まれ、その各々がその対象と合一している（書簡66, G IV p. 280）〉という思想をすべて額面通り受け入れ、それを可能にする心的表象のメカニズムを示した上で、その内実が**事実上の唯物論**と呼ぶべき思想に収斂することを示す作業である。筆者はすでにこの作業を終えているが、少なくとも読み手にとり労多く実り少ない論証であり、公表に関しては現在未定である⁽¹⁴⁾。もう1つはテキストの背後に遡り、スピノザが無限数属性論を提起した動機が、『エチカ』の構想にとって決して本質的なものではなかったことを示す作業であり、これはこの「スピノザにおける観念とコナトゥス」を締めくくる論考として公表する。

・観念の観念と神的自己述定

だが、それ以前に取り組むべき課題として、「観念の観念（idea ideae）」（2P20-23; cf. TdIE 33-38）の問題がある。「観念の観念」とはある観念それ自身を観念対象とする観念であるが、観念の観念にもまたそれを対象とする観念があり、その観念にもそれを対象とする観念があり、このような反省的観念の無限の連鎖が神的知性には含まれる。しかるに、このような反省的観念の無限連鎖は観念の心的表象の力に依存しており、それゆえ他属性に対応物をもたないように思われる——このような異議が、前節末の示唆には向けられ得る。

これまでの考察から半ば明らかであるが、本稿の考察はこの異議に対する明確な反論を用意できる。つまり、本稿がすべての属性の内に見いだした神的自己述定はすでに再帰的な記号過程であるがゆえ

に、その内には隠伏的に無限に高階の自己述定が含まれている。すなわち、例えば犬が走っているとき、それは犬についての走行の述定であるだけでなく、犬の走行の述定についての述定でもあり、述定についての述定についての述定でもあり、以下無限に続く。ここに、無限に高階の反省的観念の他属性での平行論的対応物を見いだすことができる。

・続稿で取り組むべき課題

以上の素描は、本稿の考察を踏まえる限り一定の説得力をもつ筈だが、今のところ少なくとも2つの問題を抱えており、その解決が続稿の課題となる。

まず、今示した解釈は、必ずしも『エチカ』の論証に沿ったものではないので、それを『エチカ』のテキストに沿ったものとして提示する必要がある。これが第1の課題である。

また、この解釈は、ありとあらゆる神的自己述定に、一律に無限に高階の再帰的自己述定が隠伏的に組み込まれている、ということまでしか示していない。しかし人間精神は、あるときには対象認識を行い、あるときには反省的認識を行う、という選択的反省を行うのであり、この事実を本稿の解釈は説明しない。だが、同じ問題点はすでに『エチカ』における「観念の観念」の思想に向けられてきたのであり (e.g. Bennett 1984, p. 191), それゆえ本稿の解釈からスピノザにおける選択的反省の説明を再構成できれば、それは単に本稿での解釈の正当化だけではなく、スピノザ解釈におけるアポリアの解決にもつながる。これが第2の課題である。

凡 例

『エチカ』からの引用は以下の略号で表記する：Def/定義、Exp/説明、Ax/公理、P/定理、Dem/証明、C/系、S/備考、AD/感情定義。『知性改善論』はTdIEと略し、ブルーダー版以来使用されてきた節番号で参照箇所を示す。

《注》

- (1) 本小節の内容は木島 2017 年と木島 2019 年 a 第 1 章で詳しく論じてある。
- (2) 「事態 (state of affairs/Sachverhalt)」と「事実 (fact/Tatsache)」は重なり合う概念だが、ヴィトゲンシュタインの場合、この世界を構成しているのは事実の総体であり、事実を分析して得られる対象の論理的に可能な組み合わせの総体が事態の総体である (ヴィトゲンシュタイン 2003 年の訳者解説を参考にした)。
- (3) 第 2 部冒頭の段階で示された「真なる観念の諸特質ないし内的諸徴表のすべてをもつ」という規定は「十全性」の実質的な「定義」ではあり得ない。この規定は「真なる」という「外的徴表」を参照した、それ自体外的な規定なのであるから、仮にそれが本質的な定義であったならば、それは内的徴表を外的徴表によって定義するという破綻した主張になるであろう。
- (4) 「十全な観念」が「真なる観念の諸特質ないし内的諸徴表のすべてをもつ」ことが証明されるのは 2P43 に至ってだが、これを論点先取として難すべきではない。第 2 部冒頭の段階では、「十全な観念」の実質的な説明に先立ち、どのような観念が「十全な観念」と呼ばれるのかを見分けるため、予め外的徴表に基づく手引きを与えている、と解すればよい。
- (5) 両者の著作は、分析哲学の伝統の中での形而上学の復権という動向の中にある。またカーリーは米国およびオーストラリア在住時におけるパスモア (John Passmore: 1914-2004) との交流などにより、オーストラリア学派との接点もあったと見られる (木島 2017 年参照)。
- (6) この解釈はパーツの解釈 (Balz 1918) を継承するものである (cf. Bennett 1984, p. 128; pp. 53-54)。

- (7) ローゼンタールはこの立場を、抽象的な命題からは真理値の確定に必要とされる指標性が抜け落ちてしまうが、心的行為においてはそれ自体の指標性が確保されるという論拠から支持するが、我々は個別の論点より、真理値の担い手に関するローゼンタールの思想とスピノザの観念理解の全般的な一致を重視する。
- (8) この点で本稿は、スピノザの「形相的有」としての観念と「客象的有」としての観念を、それぞれ「心的行為 (geistiger Akt)」と「表象内容 (repräsentationale Inhalt)」と解し、後者を論理的な操作の対象となり得る単位と見なすペルラー (Perlar 2008) とは見解を異にする。一方、デラ・ロッカ (Della Rocca 2003) は、『エチカ』2P48-49における「意志」と「知性」を「心的行為」と「その命題内容」とする点でローゼンタールと同じ用語法に沿っているとはいえ、両者の一体性を強調する点では本稿の解釈と一致する。
- (9) ドゥルーズは「記号」と「表現」を峻別するが (Deleuze 1968, ch.11), ここでは「記号」をより広義の中立的な意味で用いる。
- (10) ゆえにそれは万物の外的制約としての狭義の「法則」ではない、木島 2019 年 a 第 8 章第 3 節参照。
- (11) この系では、諸個物が「神の諸属性の諸変状あるいは諸様態であり、それによって神の諸属性が一定の規定＝決定された様式＝様態によって表現される」と定義される。ここで表現を担う媒体 (= 記号) を指すための副詞表現「一定の規定＝決定された様式＝様態によって (certo et determinato modo)」は、内容的に考えて、そこで表現されるべき様態＝個物やその変状そのものであると考えられる (この 2 つが一致しないとすると、諸々の不整合が生じるように思われる)。ここにも、表現媒体 (記号) と表現されるべき対象の一致という再帰的な構造が示されていると言えよう。
- (12) 有名なのはモルナーの「物理的志向性 (physical intentionality)」だが (Molnar 2003, ch. 3), この理論はブレンターノの志向性概念を「力」一般に拡張する点で、ブレンターノの概念の二元論的性格を受け継いでいる (詳しくは木島 2019 年 a 第 9 章参照)。一方、ヘイルはより自然主義的な姿勢で力 (傾向性) と志向性を結びつける (Heil 2003, ch. 18)。
- (13) ガーバーが指摘するように、初期の『短論文』にはデカルト的二元論が見いだされる (Gaber 2015)。
- (14) 筆者はこの問題を博士論文 (木島 2019 年 a) の「補論」として論じたが、20 万字超の大部の草稿となったため、提出稿には組み込まなかった。また、本稿を含む「スピノザにおける観念とコナトゥス」も、博士論文の第 4 部として執筆したが提出を見送った草稿の改稿版である。

文 献

- Armstrong, D. M.. 1997. *A world of States of Affairs*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Balz, Albert G. A.. 1918. *Idea and Essence in the philosophies of Hobbes and Spinoza*. New York: Columbia University Press.
- Bennett, Jonathan. 1984. *A Study of Spinoza's Ethics*. Indianapolis: Hackett.
- Carriero, John. 1995. "On the Relationship between Mode and Substance in Spinoza's Metaphysics". In *Journal of the History of Philosophy* 33(2), pp. 245-73.
- Carriero, John. 2015. "Spinoza, the Will, and the Ontology of Power". In Melamed 2015, pp. 160-82.
- Curley, E. M.. 1969. *Spinoza's Metaphysics: An Essay in Interpretation*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Curley, E. M.. 1975. "Descartes, Spinoza and the Ethics of Belief". In M. Mandelbaum & E. Freeman (eds.), *Spinoza, essays in interpretation*. Chicago, IL: Open Court, pp. 159-89.
- Della Rocca, Michael. 2003. "The Power of an Idea: Spinoza's Critique of Pure Will." In *Noûs*, 37(2), pp. 200-31.
- Deleuze, Gilles. 1968. *Spinoza et le probleme de l'expression*. Paris: Editions de Minuit. (邦訳, ジル・ドゥルーズ『スピノザと表現の問題』工藤喜作, 小柴康子, 小谷晴勇訳, 法政大学出版局, 1991 年)
- Garber, Daniel. 2015. "Spinoza's Cartesian Dualism in the *Korte Verhandeling*". In Melamed 2015, pp. 121-32.
- Garrett, Don. 2002. "Spinoza's conatus argument". In Olli Koistinen & John Biro (eds.), *Spinoza: Metaphysical Themes*. Oxford; New York: Oxford University Press, pp. 127-58.
- Geach, P. T.. 1965. "Assertion". In *Philosophical Review*, 74, pp. 449-65. (Reprinted in P. T. Geach. *Logic Matters*,

- Oxford; New York: Basil Blackwell, 1981, pp. 254-70.)
- Heil, John. 2003. *From an Ontological Point of View*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Jarrett, Charles. 1977. "The Concept of Substance and Mode in Spinoza". In *Philosophia* 7, pp. 83-105.
- 木島泰三 2012 年「スピノザの複合物体論の「決定論的行為者因果説」解釈からの読み直し」『法政大学文学部紀要』第 65 号, pp. 31-45 (<http://hdl.handle.net/10114/7443>)
- 木島泰三 2017 年「現代英語圏におけるスピノザ読解——分析形而上学を背景にした、スピノザの必然性概念をめぐる側面的考察」上野修／米虫正巳／近藤和敬編著『主体の論理・概念の倫理——20 世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』, 第 4 部第 1 章, pp. 399-415
- 木島泰三 2019 年 a「スピノザ『エチカ』における自然主義的プログラムとコナトゥス論」(学位論文, 学位授与番号 32675 乙第 238 号, <http://doi.org/10.15002/00021757>) (要約のみ公開))
- 木島泰三 2019 年 b「スピノザにおける決定論的な「判断の意志説」(スピノザにおける観念とコナトゥス・その I)」, 『法政大学文学部紀要』第 79 号, pp. 31-46, <http://doi.org/10.15002/00022414>)
- 木島泰三 2020 年 a「スピノザにおける観念形成と行為者因果 (スピノザにおける観念とコナトゥス・その II)」, 『法政大学文学部紀要』第 80 号, pp. 47-63, <http://doi.org/10.15002/0023064>)
- 木島泰三 2020 年 b「スピノザの認識理論における決定論的行為者因果説と能動／受動概念 (スピノザにおける観念とコナトゥス・その III)」『法政大学文学部紀要』第 81 号, pp. 27-43, <http://doi.org/10.15002/00023464>)
- Locke, John. 1975 (1689). *An Essay concerning Human Understanding*. ed. with introd. by Peter H. Nidditch. Oxford: Oxford Clarendon Press. (邦訳, ジョン・ロック, 『人間知性論 (全 4 巻)』大槻晴彦訳, 岩波文庫, 1972 年—1977 年)
- Lowe E. J.. 2006. *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Mason, Richard. 2007. *Spinoza: Logic, Knowledge and Religion*. Aldershot: Ashgate.
- Melamed, Yitzhak Y.. 2009. "Spinoza's Metaphysics of Substance: The Substance-Mode Relation as a Relation of Inherence and Predication." In *Philosophy and Phenomenological Research* 78(1), pp. 17-82.
- Melamed, Yitzhak Y.. (ed.). 2015. *The Young Spinoza: A Metaphysician in the Making*. New York; Oxford: Oxford University Press.
- Molnar, George. 2003. *Powers: a study in metaphysics*. Stephen Mumford ed. with introd. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Perler, Dominik. 2008. "Begriffliche und psychologische Ordnung bei Spinoza." In *Archiv für Geschichte der Philosophie* 90(2), pp. 188-215.
- Rosenthal, David M.. 1986. "Will and the Theory of Judgment". In Amélie O. Rorty (ed.). *Essays on Descartes' Meditations*. Berkeley: University of California Press, pp. 405-34.
- Spinoza. 1925. *Spinoza Opera*. Carl Gebhardt Hg. Heiderberg: Carl Winters, Universitätsbuchhandlung. (G と略記し巻数をローマ数字で付す)
- 上野修 2005 年「スピノザと真理」, 村上勝三編『真理の探究——17 世紀合理主義の射程』知泉書館, pp. 155-176
- ヴィトゲンシュタイン 2003 年 (1922 年)『論理哲学論考』, 野矢茂樹訳, 岩波文庫

Spinozistic Agent-Causation as Divine Self-Predication:
An Integral Account of Spinoza's Theory of Ideas and Theory of *Conatus*
(idea and *conatus* in Spinoza: IV)

KIJIMA Taizo

Abstract

As demonstrated in our previous paper, according to Spinoza's agent-causation model, a thing's *conatus* (striving) to produce or maintain its *affectio* (act or state) and its *determinatio* (causal determination) to produce or maintain its *affectio* are identical. Such *conatus/determinatio* bears predicational contents and thereby corresponds to the mental affirmation of ideas in the divine infinite intellect that comprises human minds. In this paper, we propose that Spinozistic mental representations are substantially based on the *conatus/determinatio* viewing a thing's action or agent-causation as divine self-predication. For example, when a dog runs, the dog divinely self-predicates its running as its *affectio* of itself as a subject. Such predication is self-reflexive in two ways: (1) The roles of the "subject term" and the "predicate term" are played by the signified thing and its *affectio*, respectively, rather than by external signs. (2) The subject of the predicative act is the "subject term" itself. Furthermore, we consider such self-predication as divine owing to two reasons: (1) It is an aspect of the basic causal process of *Deus, seu Natura* (God, or Nature). (2) The ultimate subject of such predication is *Deus, seu Natura* itself, and it predicates its *affectio* of itself. We also propose that such divine self-predication is regulated through a divine syntax, which is identical to the ontological structure existing in the world and the laws of nature. Conversely viewed, this suggests that the Spinozistic ontological structure and causal laws have an intrinsic communicative characteristic, similar to linguistic syntax.

The aforementioned considerations have an important implication for the status of ideas. On the one hand, Spinozistic ideas are considered as *truthbearers*. Unlike general viewpoint, these truthbearers are not abstract propositions; rather, they are propositionally-structured mental acts involving affirmative forces. On the other hand, divine self-predicative acts are *truthmakers*, which possess propositional structures and predicative forces owing to the *conatus/determinatio*. Additionally, their common forces, which are indeed the one and same force, play majority of the fundamental roles required for mental representations. Hence, to realize full-fledged mental representations, merely a correlation is required between two different but isomorphic divine attributes, namely thought and extension. Such a correlation can turn mere modes of thought into ideas, but it can only provide a superficial status to them as external signs of bodies.

Furthermore, we suggest that the self-reflexive characteristic of divine self-predication provides the foundation for "ideas of ideas," which will be discussed in detail in our next paper.